掌編ハウアー

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
掌編ハウアー

【Ｎコード】
Ｎ５５０４Ｚ

【作者名】
ごはんライス

【あらすじ】
２０００字設定です。とある人生のヒトコマ。悲しい人生。

原付が故障。修理費が二万。確かに月収が４０万なら苦にならない。しかし９万だから真面目にきつい。華子に小遣いをもらってなかったら、両親に助けてもらってなかったら、フルンドのリトルヘルプがなけりゃ、とっくに自殺。恩返し。ただ小説しかない。カネがない。

松山進一は、部屋でひたすら小説を書き読んでいた。鬼気迫る。この世の終わりが来たかのような表情。笑ってはいけないスパイのＤＶＤが出たんで、スパイの話を書いてる。スパイシースパイって題名。スパイに関する知識がないんで荒唐無稽。進一は疲れてきたんで、コンビニに行く。うまい棒の３０本入りを４袋買う。３袋は生徒に。クリスマスイブに授業があってかわいそうだから、アルバイトの進一からのささやかなプレゼントだ。子供の笑顔が好きな進一。政治家の笑顔を殴りたい進一。

風が吹く。寒いけど、未来に胸高鳴る。プロとしてこれから大活躍する。

進一の飼っていた犬が死んだ。老衰。朝、犬小屋に行ったら、動かなかった。大好きだった。

悲しすぎて、華子を抱く。華子がいつもより激しいと言った。

進一はとにかく日曜日のレジが地獄。お客様が途切れない。真面目に自殺しようかなと考える時がたまにある。アルバイトは社会保障がゼロ。既存の社会を徹底的に破壊して新しい日本を構築したい進一。悲しい日々。やるせない。働いても働いても結婚できない。陰鬱。もういやだ。

雨が激しく降った。

バス通い。田舎ゆえに自宅からバス停まで結構な距離。まあしかし気分転換にはなる。風景をケータイで撮影し、華子に送ったりする。途中、道路工事。原付に乗ってる時は邪魔くさいなあくらいにしか思ってなかったが、歩いてるとがんばってんなあと思えてくる。不思議。白い空。足の親指が痛い。ケータイに輪ゴムを巻いてる。カバーが壊れてる。

佐藤友哉の短編集は当たりだった。この短編集はなかなかいい。さすがプロ。ただ、無論、プロといえど、人間だから弱点はある。枯れた街路樹。タバコに火をつける。ズボンがずれ落ちそう。太ってるからだぶだぶのズボンを買った。ベルトで止めていたが、ベルトが緩んできた。華子はいま何をしているであろうか。東京にいる。遠い。煙が空に紛れる。

テレビでマラソンのことをやっていた。がんばれニッポン、震災に負けるな、という感じ。被災地での開催かな。

二面性がある。やはり日本人だからこういうのに弱い。決して挫けないのは日本のいいとこかなと。外人はすぐに挫ける。

ただ悪い面もある。マラソンをやる人たちはある程度裕福な人たちだ。本当に貧困に苦しんでる人はマラソンなんてするひまがない。マラソンにカネをかけるならその分を、貧困層に回せばいいのに……と偽善性に腹が立つことがたまにある。

これは進一の意見なのか作者の意見なのか、それはよくわからない。進一は、原付が直ったので、銭湯に行った。しかし、今度は配水管が壊れた。うんこのにおいが漂う。一難去ってまた一難。世の中ってのは過酷である。でも、生きていかなければならない。理由なんてない。ただそこに生があるからオレたちは進むわけである。これは進一の意見でもあるし、作者の意見でもある。

池で、ボートに乗る。華子と二人だ。「いい天気ねえ」「そうだね

え。華子。パンツ見えてるぜ」「いやあん」
いい天気である。いい感じである。
寒いけど、それもまた雰囲気だ。世の中ってのはうまくいかない。
テレビで拳銃でずどんと撃たれるシーンを観ると、いっそのこと撃たれた方が幸せなんじゃないかと間違ったことを考えたりする。仕事や小説のことでもう悩まなくてもいい楽になると、誤ったことを思ってしまう。仕事も小説も本質的に面白いものである。部分的にいやなことがあるというだけで……とにかく原点に戻らないといけない。と進一は感じる。
冬である。寒い空。吐く息も白し。
この小説は２０００字設定だから、あと５００字ほどで終わる。
進一は映画館に行った。しかし、あまり面白くない映画だった。ただ主人公がぎゃあぎゃあわめいてるだけだった。
それとも進一のセンスが鈍いだけだろうか。このあたり進一は常に葛藤している。感性が鈍っていれば面白い作品もつまらなく感じるし、感性が鋭ければ、面白い作品もつまらなく感じる。難しいところである。客観的判断と主観的判断の葛藤が必要であろう。
月がきれいだ。涙が出る。縁側に座り、華子と見る。
「進一ちゃん。きれいだね」
「華子の方がきれいだよ」
「んもう。う・そ・く・さ・い」
華子が色っぽく言うので、どきっとする。
テレビで殺人事件のドラマを観た。退屈な世の中なら面白い。犯罪だらけの世の中ならつまらない。そういうもんだろうな。
「あっ」
進一は急に思い出した。「どうしたの。進一ちゃん」
「忘れてた」「何を」「どうしよう。どうしよう」「あわてないで。一体どうしたというのよ」
「どうしよう！」
進一は、急いで家を出て走った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5504z/

掌編ハウアー

2011年12月18日15時49分発行